特選
（小学生 一・二年生）

「じいじとあかちゃん」

木津川市立城山台小学校　一年　森本　琉奈

だいすきなじいじがきゅうにふつうにおはなしができなくなってしまいました。そしてすぐにびょういんにいったら、のうこうそくといわれてしばらくにゅういんになりました。おかあさんはじいじのことがしんぱいで、なんかいもおみまいにいっていました。

わたしも、いつもいっしょにとらんぷやぼうずめくりをしたり、ごはんをたべたりしているじいじがしんぱいになりました。でもぶじにたいいんしてげんきになったのでいのちがぶじでよかったなとおもいました。

８がつにともだちのおうちにあかちゃんがうまれました。かおやて、あしがちいさくて、かわいかったです。あかいかおでいっぱいあーあーとないてました。おかあさんは「あたらしいいのちがうまれたね。」といいました。

じいじのびょうきはもしかしたらいのちがなくなっていたかもしれないよ、とおかあさんはいいました。あかちゃんはあたらしいいのち、じいじはたすかったいのち。

わたしはいままでいのちってよくわかりませんでした。でもおかあさんから、「いのちがあることはあたりまえじゃないんだよ。いきたくても、なくなってしまういのちもあるんだよ。」とききました。このとき、いのちはたいせつなんだとわかりました。わたしはこれからいのちがあることにかんしゃして、まいにちべんきょうをしたり、おともだちとなかよくしようとおもいます。そうおしえてくれたじいじとあかちゃんにありがとうをつたえたいです。

講評

祖父が脳梗塞で入院した。トランプをしたり、一緒にご飯を食べた思い出を思い返し、心配になるが、無事退院でき、「いのちが無事で良かった」と感じる。一方、友達の家に赤ちゃんが生まれた。顔や手、足が小さくとてもかわいい。母から、祖父は「いのちが亡くなってしまっていたかもしれない」と聞き、「赤ちゃんは新しいいのち、じいじは助かったいのち」と2つの体験を結び付け、「いのち」があることに感謝する。子どもらしく素直に述べている。